

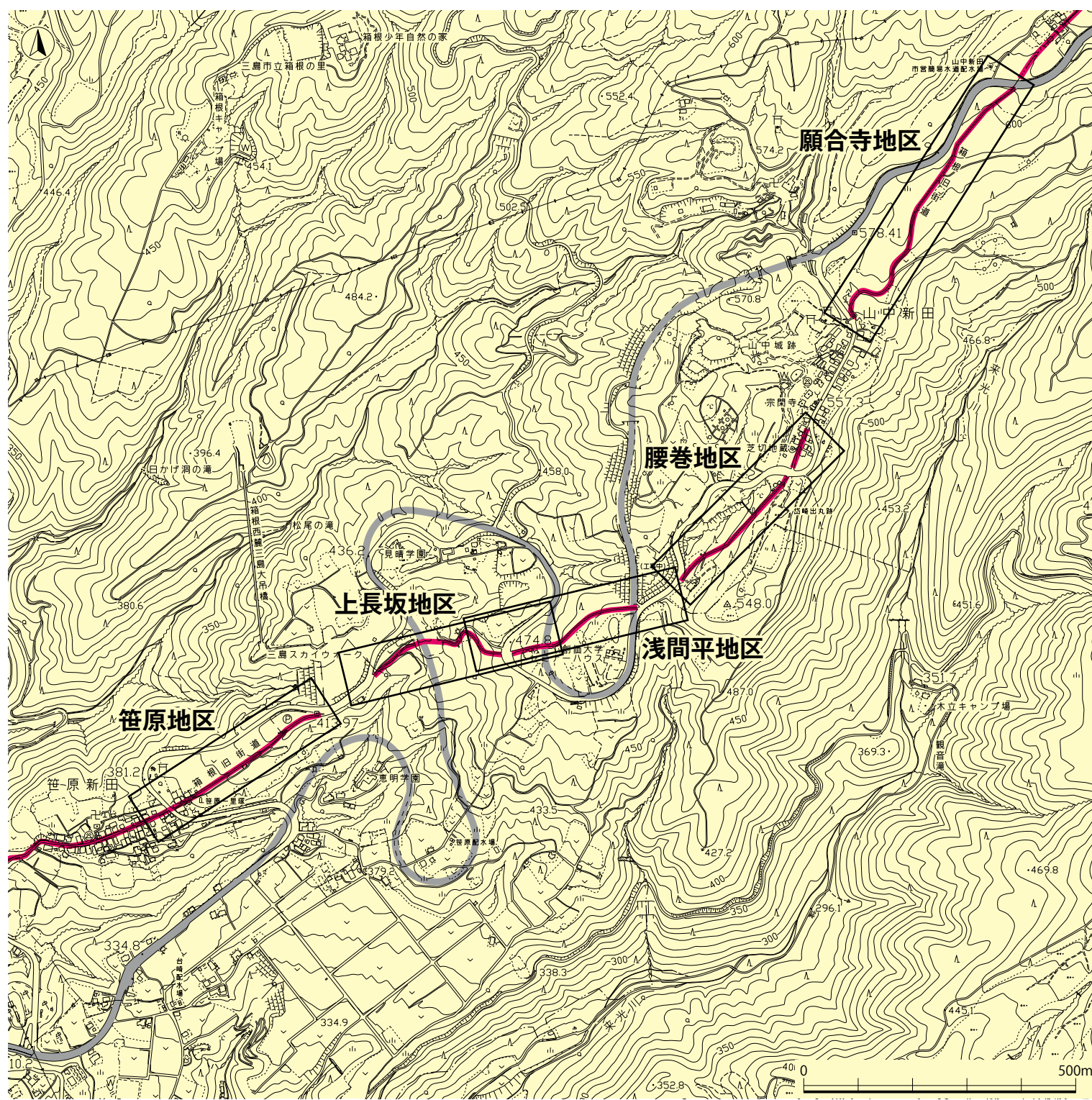
国指定史跡

箱根旧街道石畳

整備事業の概要



上長坂地区の石畳



《参考文献》

- 『静岡県歴史の道 東海道』 静岡県教育委員会
- 『発掘された箱根旧街道』 三島市郷土資料館
- 『箱根旧街道石畳と杉並木』 かなしんブックス 44
- 『箱根旧街道石畳整備事業報告書』 三島市教育委員会
- 『箱根旧街道ほか』 三島市教育委員会

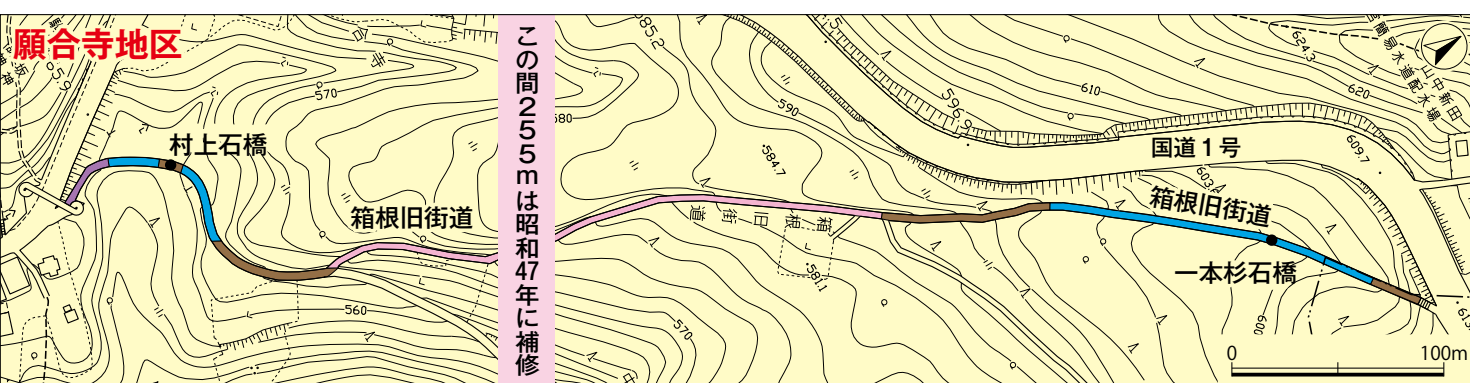
箱根旧街道石畳 - 整備事業の概要 -

編集・発行 三島市教育委員会 文化財課
 〒411-0035
 静岡県三島市大宮町1丁目8番38号
 TEL 055-983-2672 FAX 055-983-0870
 E-mail: bunkazai@city.mishima.shizuoka.jp

印刷 文光堂印刷株式会社
 発行年月日 令和3年3月31日(第3版) 3,000



箱根旧街道石畳は平成16年10月18日付けで国の史跡に追加指定されました。三島市教育委員会では本紙の他に、上記のリーフレットを発行しています。箱根旧街道ウォーキングや市内の散策に是非ご利用下さい。



この間255mは昭和47年に補修



発掘調査で出土した石畳



整備後の石畳(下部基礎整備B)

かんごうじちく 願合寺地区

願合寺地区は総延長で約720mありますが、昭和47年に補修した255mを除く範囲の整備を行いました。この地区の石畳は最も良く残っていましたが、地形的な制約から昔のままの状態では保存することはできませんでした。

整備の手法は、基礎の上に発掘調査で出土した石材を任意の位置に敷く下部基礎整備Aと、基礎の上に根府川石を敷いて平成の石畳を造る下部基礎整備Bです。石材の違いに注意して歩いてください。

また、江戸時代の後半に作られた『東海道分間延絵図』に描かれている、村上石橋と一本杉石橋が発見されて話題になりました。



村上石橋(基礎部分)

とうかいどうぶんげんのべえず 東海道分間延絵図

江戸幕府の道中奉行所が測量の結果を元に作成した絵図で、江戸時代後半の宿場の様子が正確に描写されています。山中新田の部分には街道に面した38軒の家の他に、宗閑寺や出土した村上石橋と一本杉石橋が描かれています。



一本杉石橋



『東海道分間延絵図』より「山中新田(部分)」(東京国立博物館所蔵)

2021 三島市教育委員会



箱根旧街道石畳の歴史

江戸時代初期の箱根越えの坂道は、雨が降れば脛まで泥に滑ってしまうような悪路で、ここを通る旅人は大変な苦勞をしました。幕府はこうした旅人の便を図るため、街道に箱根竹を敷きましたが根本的な解決には至らず、延宝8(1680)年に金1,406両余をかけて石敷きの道にしました。これが今日有名な箱根の石畳です。

石畳の発掘調査と整備の概略

三島市は平成6年～9年度まで、町おこしを目的とした箱根旧街道石畳の整備事業を実施しました。整備の対象となったのは笹原・上長坂・浅間平・腰巻・願合寺の5地区で、全長約2kmです。

整備に先立つ発掘調査の結果、石畳は一辺が30～70cm・厚さ20～30cm程度の大型の石材を道の両側に直線的に配置し、その内側にやや小型の石材を隙間なく敷き並べた、幅二間(約3.6m)を基本とする道であることがわかりました。江戸時代の石畳に使用されていた石材の大部分は、板のように割れる性質の安山岩で、街道周辺の栄光川等の沢筋から運んできたものと推定されています。

また、石畳の石材はローム層の上に直接据えており、特別な基礎構造は作られていませんでした。大型で重量のある石材を組み合わせることによって、基礎を作らなくても十分な強度が得られていたのです。しかし特に傾斜の強い場所や、安定の悪い石材の下には、粘土に小石を混ぜ合わせた基礎材が敷かれている場合もありました。

こうした発掘調査の結果と地形的な制約に基づいて、大まかに右の6タイプの整備を行いました。新たに補充した石材は、本来の石畳の石材と同質の小田原市根府川の安山岩を使用しました。

石畳整備方法の概略(整備方法の文字の色は地図の色と一致します)

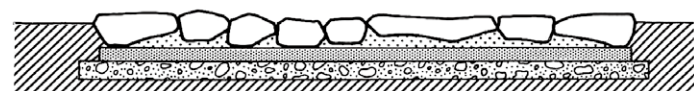
A: 現状維持・部分補修(本来の石)

発掘されたままの石畳又はわずかな欠損部に相応の石材の補充



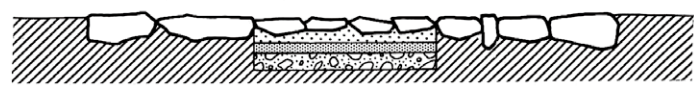
B: 下部基礎復元(本来の石)

下部基礎の上に発掘調査で出土したとおりに石畳を復元



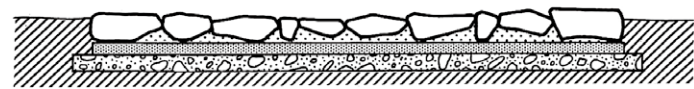
C: 部分下部基礎整備(本来の石+根府川石)

石畳の欠損部分には下部基礎の上に根府川石を敷設



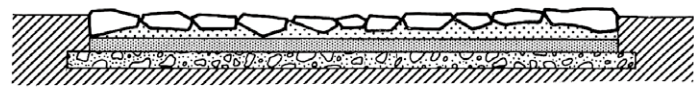
D: 部分下部基礎整備(本来の石)

下部基礎の上に発掘調査で出土した石材を任意の位置に敷設



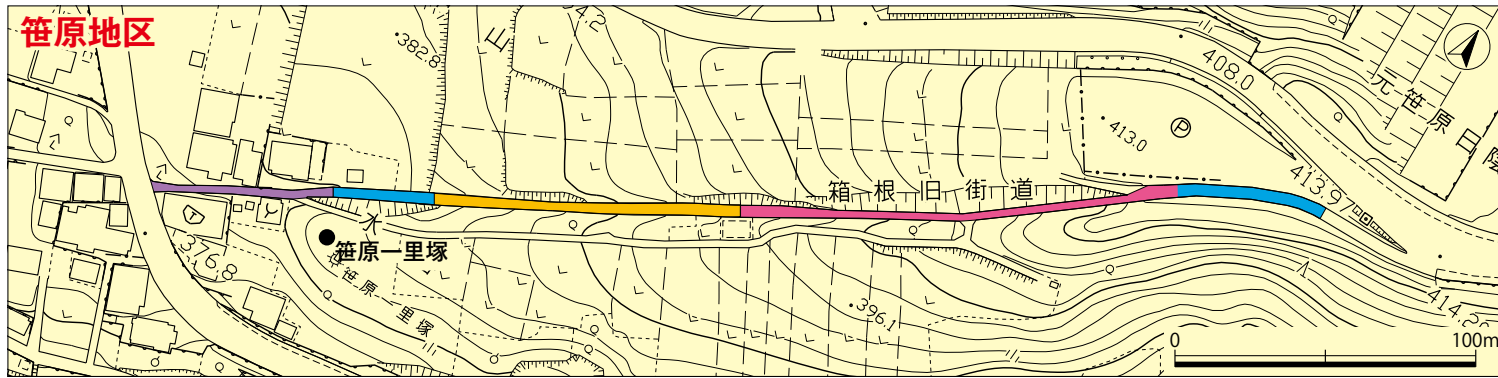
E: 下部基礎整備B(根府川石)

下部基礎の上に根府川石を平成の石畳として敷設



F: 石畳風整備(柿木石)

下部基礎の上に柿木石を石畳風に敷設



発掘調査前の石畳



発掘調査で出土した石畳

笹原地区

笹原地区の石畳は、農耕車が通ることを前提とした整備を行いました。そのため、基礎の上に発掘調査で見つかったままの石畳を復元する下部基礎復元と、基礎の上に根府川石を敷いて平成の石畳を造る下部基礎整備Bの手法が中心になりました。この他に、特に石畳の残りの良い145mをほぼ江戸時代のままの姿で残した部分補修区間、集落内の生活道路は柿木石を敷いた石畳風整備区間として整備しました。

また、江戸時代の石畳に使われている小型の石材は小口面を上にしてあります。これは地中に埋め込む面積を増やす事によって、石材の安定を図る工夫と考えられます。

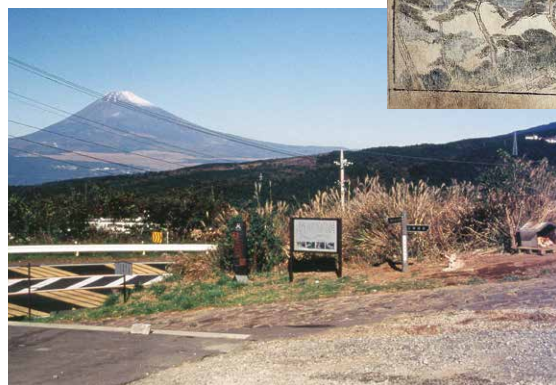


浅間平地区

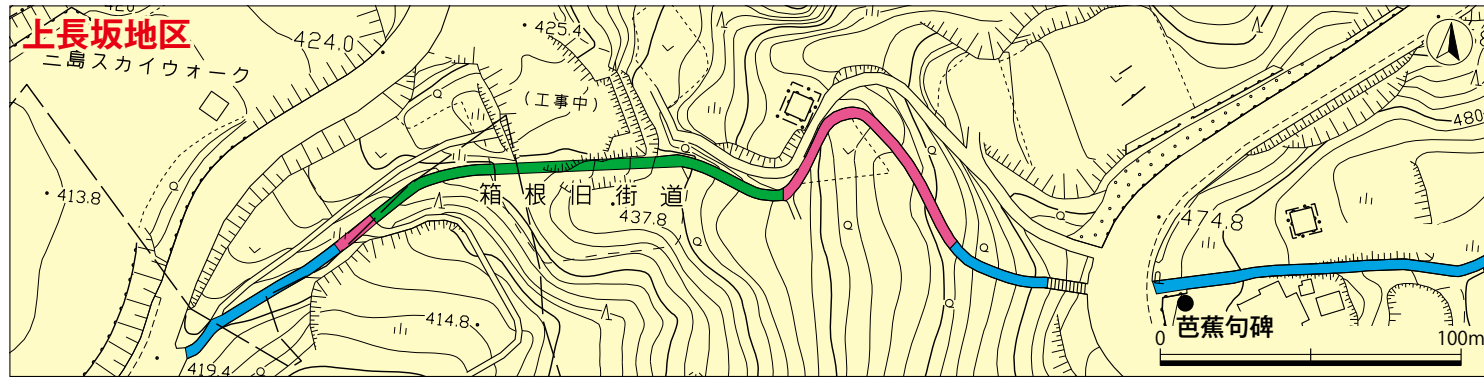
浅間平地区の整備の方法は大きく3つに分けられます。石畳が良好に残っていた中央の約43mは、部分補修区間として相応の石材の補充をしました。両側もしくは片側の縁石が残っているだけの部分は縁石をそのまま残し、石材の欠落した部分には基礎を作った上に根府川石を敷く部分下部基礎整備、石畳がほとんど残っていない国道沿いの部分は、基礎の上に根府川石を敷いて平成の石畳を造る下部基礎整備Bとして整備しました。

また、富士見平は江戸時代から富士山を望む景勝地として良く知られており、多くの街道図や旅日記で紹介されています。

現在の富士見平



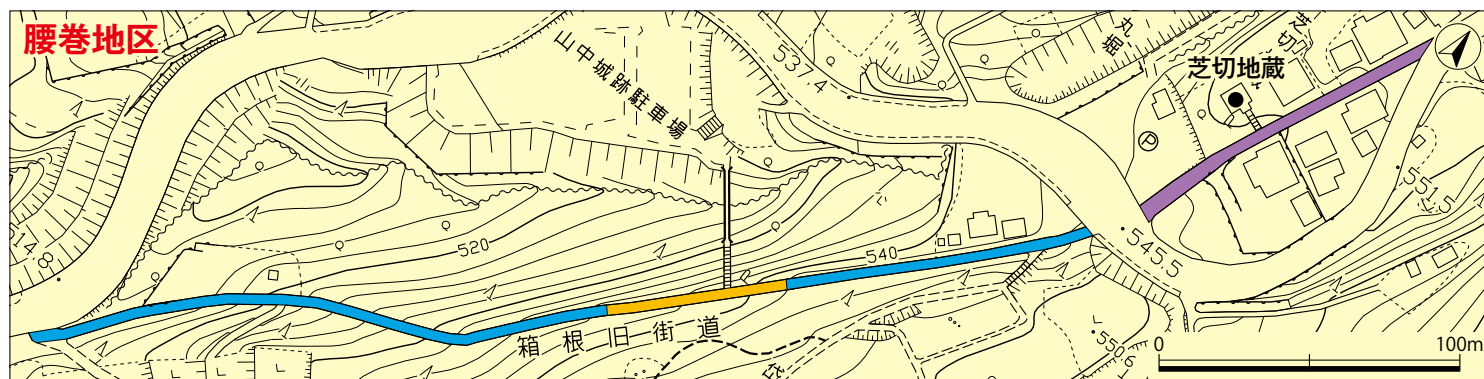
江戸時代の富士見平『東街便覧図略』より(名古屋博物館所蔵)



上長坂地区

上長坂地区では、石畳が最も良く残っていた地点を、現状維持区間として保存したので、今でも江戸時代のままの石畳を見ることが出来ます。この急坂の部分には小型の石材が凸凹にぎっしり敷かれています。私達は急坂には安定の良い大型の石材を敷くように考えがちですが、平らな石は雨や雪の日にはかえって滑りやすく危険です。江戸時代の人々はこうした危険を避けるために、小型の石材を敷いたのでしょう。

その他に、少しでも石畳が残っていた所は本来の石材と根府川石の混在する部分下部基礎整備、全く残っていなかった所は下部基礎整備Bの手法で平成の石畳として整備しました。



発掘調査で出土した石畳



整備後の石畳(下部基礎復元)

腰巻地区

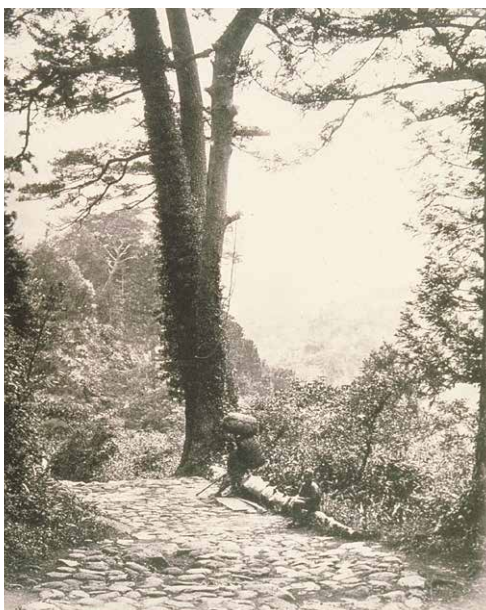
腰巻地区で石畳が良好に残っていたのは、山中城の駐車場へ降りる階段の上方20mと下方40mの約60mだけなので、この部分を下部基礎復元として整備しました。下部基礎復元とは、発掘調査で出土した石畳の正確な平面図を作った後に、全ての石材に番号を付けて一旦取り外し、新たに基礎を作った上に図面どおりに石畳を復元するという方法です。

これ以外の石畳が残っていなかった部分は、基礎の上に根府川石を敷いて平成の石畳を造る下部基礎整備Bとし、山中新田の集落内は車の通行があるので、基礎の上に柿木石を敷いた石畳風の道路として整備しました。



発掘調査で出土した石畳

発掘調査前の石畳



江戸時代末期頃の箱根旧街道(横浜開港資料館所蔵)



現在の松並木(三島市初音ヶ原)



錦田一里塚(南側)